

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 28日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720069

研究課題名（和文） 無声映画期における映画館の興行形態についての基盤的研究

研究課題名（英文） A basic study on the exhibition practices of movie theaters during the silent film era

研究代表者

上田 学（UEDA MANABU）

早稲田大学・演劇博物館・招聘研究員

研究者番号：80546143

研究成果の概要（和文）：

本研究は、日本映画の特性を理解するために、データベース等のデジタルヒューマニティーズの研究手法を取り入れながら、日本の都市における、無声映画期の映画館の興行形態を明らかにしようとした基礎研究である。本研究を通じて、映画草創期における東京と京都の映画の興行形態に差異が生じていたことや、それが歌舞伎や新派劇等の演劇との関係性の違いに因っていたことが明らかになった。これらの研究成果を、単行本の刊行や国際学会の口頭発表等によって、学術的に発信した。

研究成果の概要（英文）：

This research project is a basic study on the exhibition practices of movie theaters in Japan during the silent film era. Its purpose is to understand some features that are unique to the development of Japanese cinema, and utilizes the method of digital humanities, such as the database of flyers of movie theaters. This research sheds light on the difference in film exhibition practices of Tokyo and Kyoto during the silent film era by drawing a parallel with the difference in the relationship between the kabuki and shinpa-geki (new school) of theaters. The results of research were made available by publishing books and presentations at international conferences.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1000000	300000	1300000
2011年度	900000	270000	1170000
2012年度	500000	150000	650000
年度			
年度			
総計	2400000	720000	3120000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：映像学、映画学、映画史、メディア論、都市社会学、地域研究、データベース

1. 研究開始当初の背景

(1) 歌舞伎や人形浄瑠璃といった伝統的な諸芸能が、無声映画期の日本の映像表現に影響を与えたことは、映画史の先行研究でたび

たび指摘されてきた。しかし、これらは映画作品の抽象的な分析が中心で、日本の映像表現と伝統的な芸能の関係は、ややもすれば単調な日本文化論の図式で捉えられる場合もあり、より実証的な研究が必要とされていた。

(2) これまで研究代表者は、初期の無声映画を受容していた都市の観客について、その歴史的変遷を中心に研究を進めてきた。ただし観客の史的研究からは、その変遷が、どのように日本における映像表現の形成過程と結びついていたのかという問題が、十分に明らかにされえなかった。この課題を踏まえて、本研究は新たに、観客と無声映画とを媒介する、無声映画期の映画館の興行形態に着目した。

2. 研究の目的

(1) 無声映画期は、欧米や日本などの各国で、独自の映像表現の形成が進んだ時期である。この時期に、日本の無声映画は、語り芸や音楽、演劇など、映画以外の諸芸能とともに、映画館で興行されることが常態であった。本研究は、日本の映像表現が、どのような文化的複合性のもとで形成されたのかを解明するために、映画館の複合的な興行形態に着目し、その実態に関する実証的な基礎研究の確立を目的とする。

(2) 近年の英語圏の映画研究で、無声映画期は、物語映画という映像表現の確立をめぐる新たな議論が生み出されるなど、高い関心を集めてきた。しかし日本の映画研究は、必ずしも当該時期に関する研究が進んでこなかった。本研究は、海外にも研究成果を積極的に発信することによって、無声映画期に関する日本の映画研究の国際的なプレゼンスの向上を図ることを視野に入れている。

3. 研究の方法

本研究は、映画館の興行形態を実証的に解明するための資料として、国内外の機関が所蔵している、1920年代までの無声映画期の映画館プログラムに着目し、デジタルヒューマニティーズの方法から調査分析をおこなうことに特色がある。具体的には、映画館プログラムに記載された、「番組」に関するデータベースを構築することで、先行研究では情報量の膨大さから網羅的な調査が困難であった、当該資料の分析的把握を実現させる。また研究の遂行に際して、(1) 無声映画のジャンル編成、(2) 上演された諸芸能の形態、(3) 関東と関西の地域的比較、という三つの主題に重点を置き、それらを複合的に考察することによって、研究目的を達成する。

4. 研究成果

(1) 2010年度は、映像表現の地域性との関連から、多数の撮影所が立地した東京および

京都で発行された映画館プログラムを中心に、国内外のフィルムアーカイブにおける、その所蔵状況を調査した。その成果を踏まえ、演劇博物館や研究代表者が所蔵する、映画館プログラムの「番組」のデータベース化に着手した。具体的には、仙台、東京、横浜、浜松、京都、大阪、佐賀および大連の各都市の映画館について、映画以外の各種実演も含めたレコードを作成し、データベースの構築を進めた。またポルデノーネ無声映画祭(イタリア)において、無声映画および幻燈の劇場における興行形態の実地調査をおこない、日本における無声映画の興行形態との比較研究をおこなうための情報収集を実施した。さらに映画草創期の興行形態に関する、映画館プログラム以外の関連資料の調査に着手し、新資料の発見を含む研究成果を、アウトリーチ活動として、キュレーションを担当した企画展に反映させた。

(2) 2011年度は、演劇博物館が所蔵する映画館プログラムのデータベース構築を継続するとともに、前年度に所蔵状況を調査した他機関(東京国立近代美術館フィルムセンター、太田市立新田図書館、神戸映画資料館)における実地調査およびデータ採録を進めた。上記の成果を、前年度に作成したデータベースに統合し、あわせて先行研究を中心とした文献資料をもちいて、採録したデータの整備を実施した。このデータベースを活用しながら、無声映画期に日本映画の製作拠点としての地位を確立した、東京と京都に焦点を絞り、両都市における映画の興行形態の差異について比較研究をおこなった。その結果、映画草創期の東京と京都における映画館の「番組」が、同時代の映画興行として異なる特色を有していたこと、それが都市空間における劇場との地理的関係と深く結びついていたことを明らかにした。また、東京における撮影所と興行場の連環的な関係を、日活向島を事例とした、フィールドワーク等による調査分析から指摘し、その研究成果の一部を、企画展のキュレーションを通じて学術的、社会的に発信した。

(3) 2012年度は、前年度まで遂行してきた研究の取りまとめに重点を置いた。具体的には、仙台、東京、横浜、浜松、京都、大阪、佐賀および大連の各都市で発行された映画館プログラムについて、これまで構築したデータベースを整備、活用し、本研究が着目してきた興行形態の地域性という観点から、映画史的考察をおこなった。そして、無声映画期に現代劇と時代劇に分岐していった、東京と京都で主流となる映画製作ジャンルの差異の要因として、都市空間における映画館と諸芸能の興行形態の地理的分布に、偏りが生

じていたことを明らかにした。また新たに、無声映画期以降の旧植民地と日本映画との関係も視野に入れ、「満洲国」と「内地」の興行街における、映画館の興行形態に関する比較研究を実施した。

(4) これまでの先行研究で十分に解明されていなかった、無声映画期の映画館の興行形態を対象とする本研究の成果は、映画史の新たな研究領域を開拓するものとして、国内外で高い評価を得た。まず国内では、2009年度に立命館大学へ提出した博士学位論文を、本研究の成果にもとづき加筆修正した論文が、若手研究者博士論文単行本出版助成（早稲田大学グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」）に採択され、単著として出版された。また国外では、映画草創期における映画の興行形態の地域的な差異について、ミシガン大学日本研究センターから招聘を受けて講演をおこなった。

(5) こうした評価を獲得した、本研究の今後の展望として、まずは興行形態の比較に関する、さらなる対象地域の拡大が挙げられる。東京、京都以外の都市について、本研究は考察に必要な十分な情報量を確保できずに、明確な結論を導くことができなかったが、旧植民地も含めた映画館プログラムの調査分析を継続し、本研究が達成した基礎研究としての成果との対照をおこなうことで、無声映画期の興行形態、および日本における映像表現の形成に関する、新たな研究領域の開拓が期待される。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

上田学、「寄席の初期映画興行」、『日本伝統音楽研究センター研究報告 8 近代日本における音楽・芸能の再検討Ⅱ』、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、2012 年、査読なし、47-55 頁

上田学、「駒田好洋の晩年—セカイフィルム社の活動とその広がり」、『演劇研究』、34 号、2011 年、査読あり、91-101 頁

〔学会発表〕（計 4 件）

上田学、「大韓帝国皇太子記録映画の日本における受容」、JSPS 二国間交流事業共同研究シンポジウム「植民地期の韓国映画と日本映画の交流について」、立命館大学、2013 年 3 月 2 日

Manabu Ueda, “The Development of Regional Characteristics during the Emergence of Moving Picture Theaters: A Comparison between Tokyo and Kyoto,” Twelfth International Domitor Conference, University of Brighton (UK), 22nd June 2012

Manabu Ueda, “Modern Cities and Filmmaking in Japan Around 1910: Differences between Tokyo and Kyoto,” CJS’s Winter 2012 Noon Lecture Series, University of Michigan (USA), 8th March 2012

上田学、「最初期の旧劇映画と京都の都市空間—興行街の存立を手がかりに—」、日本映像学会第 37 回大会、北海道大学、2011 年 5 月 29 日

〔図書〕（計 4 件）

白井啓介（監修）上田学・鈴木直子（編）、『満洲映画（復刻版）』、ゆまに書房、2013 年、全 8 巻

上田学、『日本映画草創期の興行と観客 東京と京都を中心に』、早稲田大学出版部、2012 年、全 250 頁

上田学（編）、『企画展図録 日活向島と新派映画の時代展』、早稲田大学演劇博物館、2012 年、全 64 頁

上田学、「映画館の〈誕生〉—電気館における興行と観客の変容」、岩本憲児（編）、『日本映画史叢書 15 日本映画の誕生』、2011 年、森話社、179-208 頁

〔その他〕

（報道関連）

「最古の国産映画 ポスター発見」、『読売新聞』（夕刊）、2010 年 12 月 27 日

（アウトリーチ活動）

上田学、「日活向島と、その「革新」の意義」、企画展「日活映画の 100 年 日本映画の 100 年」ギャラリートーク「“日活史”を学ぼう!」、東京国立近代美術館フィルムセンター、東京、2012 年 8 月 18 日

上田学（担当）、「企画展示 日活向島と新派映画の時代展」、早稲田大学演劇博物館、2012

年 12 月-2013 年 3 月

上田学 (担当)、「時代劇映画史展－演博コレクションから－」、早稲田大学演劇博物館、
2011 年 11 月－2012 年 2 月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上田 学 (UEDA MANABU)

研究者番号 : 80546143

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :